

19番線へ

さようなら、美しい女、^{ひと}陽光^{ひかり}の人

僕には陽光は似合わないのだね
少年のようにせっかちで
文学青年のようにじれったくて
老人のように夢見心地で
そんなリズムが嫌いなのだね

もう本当に諦めるよ、嘘じゃない、今度はね
疲れてしまったのさ、とうとう
もう力が残っていないのさ、少しも

(1984.8.3)